2022年10月31日発行
発　行
社会福祉法人 栄光園
別府市南荘園町3組
〒874-0904　電話（23）2827
http://www.eikoen.jp/
編集　広報誌編集委員会
印刷　大野印刷株式会社
別府市青山1－7 電話（21）0505

インクルーシブ教育の時代を迎えて

九州産業大学　人間科学部　子ども教育学科　阿部　敬信

新型コロナウイルス感染症の感染拡大は依然として止まることを知らないまま、3年目を迎えています。もはや時代は、まさしくwithコロナを迎え、この感染症と隣り合わせていかに付き合っていくかを模索しているともいえるような状況となってきました。新型コロナウイルス感染症の影響は限定的であるとはいわれていますが、2021年の新生児の出生数は6年連続で過去最少となり、前年比3.4％減の約84万人まで減少しています。少子化は政府の諸施策の推進とは裏腹に急速に進行しています。

このような時代を迎えて、子どもを巡る状況はめまぐるしい変化を見せています。教育の分野では、2012年7月に中央教育審議会初等中等教育分科会から、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）」（以下、「分科会報告」）が公表されました。もう10年が経ってしまいました。この「分科会報告」では、「インクルーシブ教育システムにおいては、同じ場で共に学ぶことを追求するとともに、個別の教育的ニーズのある幼児児童生徒に対して、自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要である。小・中学校における通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある『多様な学びの場』を用意しておくことが必要である」と示されました。この時から、我が国の学校教育は、多様な教育的ニーズのある幼児児童生徒全てを包容する教育であるインクルーシブ教育の時代を迎えたといえます。

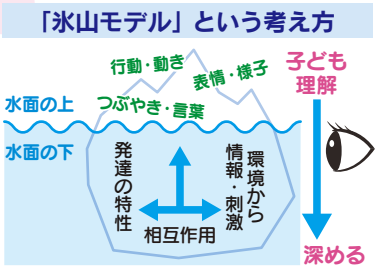
昨年、2021年3月には、中教育審議会初等中等教育分科会から「「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）」（以下、「分科会答申」）が公表されました。この「分科会答申」では、初等中等教育全体を通じて「一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが必要」としています。やはり、ここでも、自己も他者も価値ある存在として、互いの多様性を尊重することが、すなわち持続可能な社会の創り手になると示されています。

私が栄光園の二つの保育所に、園の研究保育のために定期的に訪れるようになって、10年以上になります。新型コロナウイルス感染症の感染拡大があり2年間ほど中断していましたが、この4月から再開しております。二つの保育所では、当初より、障害のあるお子さん、特別な配慮が必要なお子さん、外国籍のお子さんが在籍しており、「個別の月案」を作成され、特別な保育ニーズに応じたきめ細かな保育を展開されていました。先ほど述べた国の施策以前よりインクルーシブな保育を実践されていたといえます。特に障害のあるお子さんについては、客観的な実態把握を定期的に実施され、自分たちが行っている個別の配慮や保育の工夫が当該の子どもによって妥当性のあるものになっているのかを検証しようとされている姿には、私もずいぶんと刺激を受けました。また、月に一回の研究保育を実施することにより、保育士相互で熱心な討議を行い、自らの保育力の研鑽をされていることに、とても感心いたしております。助言者という立場ではありますが、むしろ私の方がとても多くのことを学ばせていただいております。

多様な教育的ニーズを把握するための子ども理解の基本的な考え方として「氷山モデル」という考え方があります。北極海や南氷洋に浮かぶ氷山の海水面上に見えている部分は氷山全体積の7分の1といわれています。ほんの少ししか見えていないのです。その大部分は海水面の下にあります。園や家庭で見えている子どもの姿や行動、言葉は、海に浮かんでいる氷山と同様にほんの少しの表面的なものに過ぎないと考え、その背景にある一人一人の子どもがもつ特性や子どもから見た環境は、すぐには見ることができない、海水面の下にあると考えます。表面的に見える子どもの姿や行動、言葉をもたらしている海水面の下にある子ども自身の思いや考えを把握し、それらに寄り添って保育を展開していくことが大切だということです。

これまで、私が同席してきた「個別の月案」の検討や研究保育における研究協議の検証軸がこの「氷山モデル」の考え方に凝縮されているといえます。「分科会報告」では、先の文言に続いて「基本的な方向性としては、障害のある子どもと障害のない子どもが、できるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべきである。その場合には、それぞれの子どもが、授業内容が分かり学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら、充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身に付けていけるかどうか、これが最も本質的な視点であり、そのための環境整備が必要である」としています。子どもたち視点で見た時に、自身が目の前で展開されている活動に参加できている実感をもちつつ、「あ～楽しいな」「もっとやってみたいな」「こうやって遊んでみよう」「先生、大好き！」「お友だちと一緒にいるのは心地いい！」という気持ちをもって保育園での生活を過ごしているのかを、これからも「氷山モデル」の考え方、つまり、子ども視点でとらえた世界観を考えることで、ともに検証していけたらと思っております。

これが、栄光園各所におけるインクルーシブな取り組みではないかと思っております。



児童養護施設

マツモトホーム　夏のホーム行事

保育士　石本　悠莉

8月に稲積白山川キャンプ村へ行きました。3年間新型コロナウイルス流行でホーム行事を行うことが出来なかったため、ホーム児童、職員共にとても楽しみにしていた行事の1つでした。児童の希望を尊重しながら、配車メンバーや入浴メンバー等を決め、中学2年生と小学4年生の児童が自ら注意事項や持ち物リスト等、皆のためを思っての内容で「キャンプのしおり」を作成しており、他者を思いやる言動が多く見られました。実際に出来上がったしおりを手にし、さらに楽しみな気持ちが大きくなっていました。

キャンプ1日目では、敷地の横にある川で遊びました。泳ぎが苦手な児童も、他の児童や職員から勇気を貰い川へ飛び込む姿や、水風船や浮き輪を使って水遊びを楽しむ幼児の姿もあり、とても楽しい時間になっていました。夕食のBBQは、ただ食べるだけでなく中学生2名が率先して食材を焼くお手伝いをしてくれ、大人への気遣いも見られ優しい一面を垣間みることができました。花火では、火の取り扱い方や持ち方などを学びながら楽しむことが出来たようです。

2日目は、夏休み中に取り組んでいたラジオ体操を皆で行いました。大自然に囲まれてのラジオ体操は、普段とは気分も違い児童らも清々しい表情で行っていました。

キャンプ場を後にし、道の駅「みえ」や原尻の滝へ行き、地域の農産物を知ったりお土産を買ったりしました。また、恐怖を感じながら吊り橋を渡り達成感を味わっている児童もいました。

今回のホーム行事で、自分本位な言動を越えて他者のことを考えた言動も見られ、自然に触れる体験や学びのあるホーム行事となりました。

今回の夏休みでは、キャンプ行事だけではなく担当職員と外出する等、昨年度以上の思い出が出来たように感じます。

未だ、新型コロナウイルスは終息していませんが、今しかないホーム児童メンバーで、今しかない瞬間を大切に日々を過ごせて行けたらと思います。

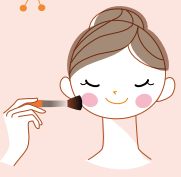
オゴウホーム　自立に向けた支援

児童指導員　佐藤　桃佳

現在、オゴウホームには小学生2名、中学生1名、高校生1名、専攻生1名の児童が在籍しており、私は今年度よりオゴウホームの一員として、支援学校に通う高校2年生の担当職員として支援を行っています。私自身、高校生を担当することは初めてであり、当初も今も自立とは何か、どんな支援が必要なのか、自問自答しながら支援を行っています。

高校2年生は卒園後の進路や住む場所を見極めていく大事な時期です。現在、支援学校の教員と連携しながら宿泊実習の参加や職場見学、グループホーム見学を行い、本人が将来どんな仕事に就きたいのか、どんな仕事が合っているのか、どんな所に住みたいか、一緒に検討しています。

大人への一歩～ メイク体験



「ダンデライオン美容研究所」の金谷英津子様においでいただき、昨年に引き続き今年度も卒園を控えている高校3年生の女子児童にお化粧の基本を教えていただきました。

社会に出て人と関わっていくとき、第一印象は重要です。メイクによって、自分自身を素敵に演出する方法としてメイクの仕方を学び、周りの方から良い印象を持っていただけるようになってもらいたいと考えメイク教室を企画しました。社会に出るとメイクをすること自体がマナーとなる場合があります。ですから、卒園する児童にはきちんとしたメイクの仕方を学んで社会に旅立っていってほしいと思っています。

化粧をする前は、高校生の児童だった彼女が、化粧をしていくうちに素敵な女性に変身していきました。彼女の表情や目の輝きが変化していく様を間近で見させていただきました。メイクには、女性を素敵に変えていく魔法の力があるのでしょう。

メイクの仕方を丁寧に教えてもらい、今後自分でもできるようにと自分自身でも化粧をしていきながらメイクを学んでいました。鏡を見ながらこれからも自分で練習していくと張り切って答えている姿が印象的でした。

これから卒園までの半年間、大人への階段を上っていく児童を温かく見守っていきたいと思います。

また、ホームでは買い物体験やATMの利用練習、1人暮らし体験、1人で病院を受診するなど、社会体験を増やしています。このような体験を増やすことで、将来社会に出たときに困りや不安が少しでも和らぐのではないかと考えています。

本人自身、将来に向けた不安や様々な悩みがあり、誰にも相談できずに一人で悩み、不安定になる姿が多く見られます。人に相談しても変わらない、無理だ、と諦めてしまう時もあります。しかし、最近はカードやノートを作成して相談したい時に活用する、自身で読書など好きなことをして気分を変えるなど、自身で考え、工夫して乗り越えようとする姿も見られるようになりました。

将来本人には、まわりの人に好かれる人になってほしいです。そして、その方々と助け合って生活していってほしいと願っています。本人が社会人になり生きていく上で、まだまだ身につけておくべき課題はたくさんあります。私は担当職員として、自立に向けて本人にどんな力が必要なのか、どんな支援が必要なのか、オゴウホームの職員や専門職員と一緒に考え支援を行っていきたいです。

乳児院

日増しに秋らしくなってきました。今年の夏は酷暑で戸外に出てたくさん遊ぶ事は難しかったですが、その中でもテラスや木陰で水遊びを中心に行いました。

気候も良くなってきたこの頃は、園庭やグラウンドでかけまわったり、散歩に出かけたりと外遊びを満喫しています。新型コロナウイルスが次第に落ち着いてきていますが、引き続き感染予防を徹底していきます。

りすグループ紹介

りすグループリーダー　大久保　瑞穂

りすグループは現在5名（1歳2ヶ月～7ヶ月）が生活しています。りすグループは、保育者との触れ合いの時間を大切にし、触れ合い遊びを毎日取り組むようにしています。毎朝おやつの前に子どもと保育者が1対1で向かい合うようにして、触れ合い遊びの歌に合わせて行います。触れ合い遊びを通して、子どもが保育者からの愛情を感じ、自己肯定感を育むと共に保育者との愛着形成をしていき、子どもの人格形成の基盤を作れるようにしています。子どもたちは保育者が音楽を流そうとCDデッキの前に立つと、「今から始まるぞー」と言わんばかりにCDデッキの前に座る子どももいて、習慣の一つになっています。子どもの楽しみにしている姿を見ると、改めて1対1での触れ合いの大切さを再認識でき、子どもと保育者の1日の中で大切な時間になっています。

乳児院夏祭り

保育主任　得能　三志郎

新型コロナウイルスが流行して早3年。終息に向かっているとの見解が示されていますが、子どもたちは、以前に比べお出かけや買い物といった園外に出かける機会が大幅に減っているのが現状です。

そこで、院内でも何か子どもたちに、心に残る思い出の行事をしたいと現場の職員が計画し、今年度新しい取り組みとして、『乳児院夏祭り』を開催しました。担当職員が子どもと一緒に参加できるように午睡後から夕食後までの間で企画しました。

当日、子どもたちは浴衣に着替え、祭りの音楽を流しながら、出店コーナーでの買い物やゲームを楽しめるようにしました。浴衣に着替えるために一人ひとり準備をしていると、〝何が始まるんだろう〟と少し不安そうな表情をする子どももいましたが、自分の浴衣姿を鏡で見ると笑顔になり、更に夏祭りが始まると、目を輝かせて担当職員と一緒に買い物やゲームなどをして楽しみ、終始、子どもたちと職員の笑い声が乳児院中に響いていました。

子どもたちもとても楽しめていたようですが、職員も子どものたくさんの笑顔が見られてよかったと〝乳児院夏祭り〟は、みんなが満足する行事となりました。

今後も、子どもの最善の利益のために、今何が出来るのかを考えながら、子どもの笑顔を大切に取り組んでいきたいと思います。

青山保育所

クッキングをしたよ

保育士　阿部　菜月

ぞう組4・5歳児のお友だちは、今回カレーライスで必要な材料をトキハインダストリーまで買い物に行きました。事前にカレーライスで使う材料があるのかを確かめに、下見に行きました。

下見の時にはお肉や魚を見て、給食でよく出る鰆や鯵の捌かれる前の状態を見て「なんか目が赤い」「歯がある！」と大興奮の子どもたちでした。細かな部分までよく観察しているなと感心しました。

実際の買い物の時は「タマネギはこっちだよね」「あとはカレーのルーだけ」と下見に行った時にどこに何があったのか覚えていて、みんなで協力しながら、かごに入れてお会計をすることが出来ました。

5歳児のお友だちにはその日のうちに自分たちの部屋で野菜の皮を剥いたり、切ったりしました。包丁を使うことにもだいぶ慣れてきましたが、人参が硬くて少し切るのが難しそうでした。4歳児のお友だちは買い物に行った次の日に具材の皮を剥いたり、切ったりしました。野菜を切る時も「猫の手」を意識していて「こう？」と何度も確認している子どももいました。肉を炒めるところからは別の活動をしていた5歳児のお友だちも合流して、みんなの「美味しくな～れ」の魔法の言葉と共にとっても美味しいカレーが出来ました。

トマト、美味しいね

保育士　尾原　亜紀

うさぎ組のお友だちは他のクラスのお友だちが栽培していたミニトマトがたくさん赤くなったので、少し収穫させてもらいました。

新聞紙を敷いて子どもたちの目の前にプランターを持ってくると、「おー！」と声を出したり、指を差して「あった♪」と保育士に教えたりする姿が見られました。保育士が1つ採る様子を見せると、早くやってみたそうに気になるトマトを指差ししていた子どもたち。上手に指先でつまみ、取ることが出来ていました。採れたてのトマトは水で洗い、その場で食べてみました。ちょっぴり皮が硬かったけれど、とても甘いトマト。「美味しいね」と声を掛けると「うん！」とうなずき、まだ食べたいと指さす子も…。2個目も収穫し、満足そうに頬張る姿が印象的でした。

食事を通して学ぶことも食育ですが、実物の野菜や果物に触れたり、匂いを嗅いだりすることも食育活動の1つです。これからも給食の先生のお手伝いをしたり、切り分ける様子を見せたりしながら、いろんな野菜や果物に触れる機会を作っていこうと思います。

友だちとふれあいタイム！

保育士　荒金　由妃

きりん組3歳児のお友だちは、曲に合わせてふれあい遊びをしました。友だちと2人組のペアを作り、友だちの体にタッチする歌詞の曲でした。このふれあい遊びをする上で少し心配していたことは、ペアを作れずに泣いたり、体に強くタッチしてけんかになったりなどするのではないかということです。いざ、ふれあい遊びを始めると、ペアを作るときには「一緒にしよ」と手を差し伸べる姿があったり、体に優しくタッチする姿があったりと、心配していたことがいつの間にか消えていくように、最後には「もう一回やりたい！」と笑顔で楽しんでいて子どもたちの成長を実感しました。

最近のきりん組の様子を思い返してみると、貸し借りの「かして」「いいよ」、遊びに加えてほしい時の「入れて」「いいよ」など、友だち同士のやり取りが上手になってきているように思いました。

3歳児は友だちを意識し、少しずつ集団での遊びを楽しむようになります。トラブルの多い年齢の中でも、子どもたちなりにそこから友だちとの関わり方を学んでいるようです。これからも子どもたちの様子を見守り、発達に合わせた遊びを楽しみたいと思います。

小さい秋 み～つけた！

保育士　結城　奈津美

ぱんだ組1・2歳児のお友だちが運動会に向けた遊びをしに栄光園グラウンドへ行きました。運動会の遊びが終わると、子どもたちは広いグラウンドを自由に遊び始め、次第に子どもたちの手には落ち葉や木の葉、草花などがいっぱい。「せんせー、葉っぱがいっぱい！」「トンボ待て～」と、見つけた物を嬉しそうに見せてくれたり、一生懸命にトンボを追いかける姿はとてもたくましかったり、可愛かったりと様々です。

これからさらに深まる秋、子どもたち

と一緒に秋の自然に触れ、秋を感じていきたいと思います。その時の子どもの反応や発言がまたとても楽しみです。

野口保育所

主任保育士　末吉　佳奈

暑かった夏も終わり、木の葉の色も少しずつかわり秋が深まってきたように感じる今日この頃です。今年も残す所2ヶ月、時が経つのは早いものですね。毎日を大切に子どもたちと楽しく過ごしたいと思います。

夏から秋にかけての子どもたちの様子を少しずつですが、ご紹介していきます。

「シェイクアウト別府」に参加

1年に1回災害に対する心構えの準備をするための日として、9月1日を防災の日と制定されました。同日別府市でも市内一斉安全確保行動訓練〝シェイクアウト別府〟が行われ、野口保育所も参加しました。

はじめはサイレンの音に驚く子どももいましたが、保育士と一緒に布団や机の下に隠れ、その後は静かに避難することが出来ました。毎月避難訓練をしていることもあり、保育士の話を聞いて静かに避難したり地震の時の約束を子どもたちはしっかり覚えていました。日々の避難訓練の大切さを改めて感じ、これからも毎月取り組んでいきたいと思います。

夏の遊び

今年の夏も子どもたちが楽しみにしていたプール遊びや色水あそび・泥遊びなど夏ならではの遊びをたくさん楽しみました。今年は、プールや水遊びなど夏の遊びを最後まで楽しみました。どの遊びも子どもたちの笑顔がキラキラ輝いていました。

お月見

今年は、9月5日～10日をお月見週間とし、小麦粉粘土や紙粘土、花紙を使いお供えのお団子作りをしたり、お月見の制作など各クラス活動に取り組みました。子どもたちは、団子の感触を楽しみながら作っていました。玄関には、5歳児が作ったお団子や本物の旬の食材やすすきを飾りました。給食の先生が作ってくれたお月見のメニューも子どもたちは大喜びで食べていました。

運動会へ向けて

今年は、10月22日(土)栄光園グラウンドにて運動会を開催します。子どもたちは、運動会へ向けて毎日練習を張りきって取り組んでいます。引き続きコロナウイルス対策を行いながら、保護者の方にはご理解・ご協力をして頂き、子どもたちが最後まで楽しんで取り組めるよう職員一同協力しながら頑張りたいと思います。

美味しかったよ！

8月には食育の一環で3・4・5歳児が植えたトマト・きゅうり・ピーマンを収穫して食べました。みんなで毎日観察や水やりをし、実がつくと「先生！実が出来てる！」と嬉しそうな子どもたち。収穫した日には小さいクラスまで見せに来てくれました。給食の先生が収穫した野菜を給食として出してくれるとその日はいつもよりもたくさんおかわりしていました。その姿を見て、〝自分達で育てる〟という経験は大切だと改めて感じました。

また、給食の先生が作ってくれた屋台ごっこメニューの〝チケット〟を交換して楽しみました。一人一枚あるので、子どもたちはそのチケットと給食を交換出来ることがとても嬉しいようでした。コロナ感染予防を行いながらですが、子どもたちが〝食〟を楽しめるように引き続き、職員で考え取り組んでいきたいと思います。

地域交流事業

集いの場 くるみ

地域支援担当　原田　康子

7月のくるみは、ペットボトルキャップケーキやガラスタイルコースターを作りました。子どもたちは、とても集中して制作活動に取り組み素敵な作品を仕上げていました。

「お母さんにあげる」と話をしながら楽しそうに作っている児童もいました。みんな大好きな人にプレゼントしたのでしょうね。

おもちゃライブラリーをはじめました！

今年度8月より「NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ」様と「東京おもちゃ美術館」様の連携事業である「子ども食堂　おもちゃライブラリー」を「集いの場くるみ」で開設することとなりました。

遊びを通したコミュニケーションの豊かさを目指す「東京おもちゃ美術館」の選定したおもちゃを使った遊びで生まれる心の栄養を子どもたちに届けていきたいと考えております。

ともすると孤立しがちな子どもたちのコミュニケーションとつながりを支えます。家族で楽しく遊べるおもちゃも準備しています。みんなで一緒に遊びながら、家族で楽しい時間を過ごしてみませんか？きっと子どもたちにとっては忘れられない思い出となることでしょう。笑顔あふれ、多世代の交流も促される試みとなるよう心を尽くしてまいりますのでよろしくお願い致します。

開催日時
毎月第1・3土曜日
12：00～14：00

夏フェスに参加しました

8月11日(山の日)に別府競輪場で開催された夏フェスに参加しました。夏フェスの中の「子ども屋台」に出店しヨーヨーと子どもたちの作品を売りました。

今回は、子どもたちにお店屋さんになって物を売ることを経験してもらおうと、当日販売する「ペットボトルキャップケーキ・ガラスタイルコースター」の制作も、子どもたちと一緒にやってきました。「買ってくれるかなあ？」と期待と不安が入り混じった声が聴かれていました。参加を楽しみにしていた子どもたちでしたが、コロナの感染が広がり陽性者が多数出るような事態となり今回は、子どもたちの参加を取りやめ大人だけでの出店となりました。

当日参加できない子どもたちに、お店の呼び込みの声を録音させてもらい、当日は、子どもたちの「いらっしゃいませ～」の声を流すことができました。声の録音の際にも、セリフを考え、この部分はみんなで言った方がいいのではなど、子どもたちの積極的な意見が聞かれました。

今回、楽しみにしていた活動に参加できませんでしたので、次回は、ぜひ子ども達にお店屋さんの経験をさせてあげたいと考えております。その際は、ご協力よろしくお願い致します。

祝・敬老の日 いつまでもお元気で！

敬老の日に、以前から交流のある一燈園(堀田)のおじいちゃんおばあちゃんにメッセージをお届けすることといたしました。素敵な言葉をメッセージカードに書いてくれ、子どもたちの優しい思いが詰まったメッセージカードが出来上がりました。後日メッセージカードを堀田一燈園さんに児童の代表者と職員で届けさせていただく予定です。

コロナが落ち着いたらいろいろな形で交流していきたいと考えております。

バケツ稲づくり

今年の5月からスタートしたバケツ稲づくりも植え付けから4ヶ月が経ち、稲穂が黄金色になり〝実るほど頭(こうべ)をたれる稲穂かな〟の言葉通り稲穂が重そうに実ってきていました。

そこで、先日子どもたちに鋸鎌(のこぎりかま)を使って稲の収穫を体験してもらいました。初めて手にした鎌をびくびくしな

がら使っていましたが、皆、無事稲刈りを体験することができました。ご飯として食べられるまでに、脱穀、もみすり、精米とまだまだ手のかかる工程が待っています。ご飯として食べられるようになるにはいろいろな手間を掛けなければいけないことを子どもたちに伝えていきたいと考えています。一株からとれるお米は少量ですが、味わって食べてほしいと思います。

そして、お米を収穫した後の稲わらで、後日しめ縄を作る予定です。お米を**味わう**ことだけでなく、稲わらで**作ること**も楽しみ、このバケツ稲づくり体験を終わりたいと考えております。

聖書の言葉

「こうして、ロトの住んでいた低地の町々は滅ぼされたが、神はアブラハムを御心に留め、ロトを破滅のただ中から救い出された。」

（創世記19章29節）

別府不老町教会伝道師　**尾崎　二郎**

この地を歩む私たち人間の最大の懸案事項といえば、死から救われたい、ということでしょう。イギリスのエリザベス女王の葬儀が、9月19日、ウェストミンスター寺院というキリスト教会で執り行われました。女王は主イエスの僕（しもべ）として、天に居られる主のみもとへと召されました。その時に立ち会った全ての人々は、悲しみの中にも永遠に続く喜びを見出し、期待と驚きに満たされた表情をしていました。死から救われるには、この世での貴賤や上下関係は役に立たず、ただ主の前にへりくだって生きることが必要だと改めて思わされました。

さて、私たち人間は、造り主であるイエス様の僕であり、又、主の子どもでもあります。主イエス様は、私たち一人ひとりのことを「御心に留め」ておられます。さて、言葉の端々には、語り手の真意や本音が垣間見えると言われますが、それは聖書を読む際にも言えることだと思います。例えば、今日の聖書の言葉も、しばしば訳し直されて次のような新しい表現になっている聖書もあります。「神は、低地の町を滅ぼされたとき、すなわちロトが住んでいた町を滅ぼされた際、アブラハムのことを忘れず、ロトをその滅亡のただ中から救い出された。」この様に新しい訳で「御心に留め」が「忘れず」に変えられるだけで、御言葉の印象は変わってきますね。

さらに、私たちがこの世での生活において、実は期待と驚きに満ちている主の御言葉を身近なものとして受け止め聴いていくには、その言葉の端々に留意していくとよいでしょう。例えば、「御心に留め」という御言葉を、日常生活での言葉に翻訳すれば、「彼らが少しずつ紡ぎ出す言葉を受けとめ、支えつつ、『思いを言葉にする』時間にゆっくりと寄り添っていく」ということです。

（「栄光園だより第128号」巻頭言より）

アブラハムは、退廃したソドムの町から甥のロトを救い出すために、長年にわたってロトのことを心に留めて、主に祈ってきました。そして遂にその祈りがかなって、ロトとその家族たちはソドムの町から逃れ救われたのです。

主であるイエス様は、私たち一人ひとりを、いつでもそしていつまでも御心に留めておられます。そして私たちがイエス様への思いを「言語化」して言い表すことを待ち望んでおられます。主の子どもである私たちは、思春期・青年期を不安と期待をもって過ごしている子どもの様であります。

インクルーシブについて考える

青山保育所は、障がいを持った子どもと、障がいを持たない子どもの統合保育を目的とした施設として作られました。開園当初から障がいを持った子どもたちの個々の発達に目を向け保育を行ってまいりました。かなり重たい障がいを持った子どももおりましたが、子どもたちは普通にその子どもたちに手を貸し、障がいを持った子どもも自然と手を貸してもらっていました。障がいの有無など関係なく自然に触れあっておりました。子どもたちの中では、障がいがあってもそれは特別なものではなかったようです。何の違和感もなく受け止めておりました。小さい時期から一緒に過ごすことの意味はここにあるのだと思います。

また、障がいの有無に関わらず、困っている人には手を差し伸べることが、身についていくのではないでしょうか。まさに、インクルーシブな社会づくりの基礎となるのではないかと考えます。

「インクルーシブ社会」は、障害だけでなく、性別、年齢、国籍や宗教、文化などの多様性（ダイバーシティ）を認め合い、ともに暮らしていく社会を作ろうというものです。インクルーシブな社会を作ろうとするならばその基礎作りとしてどういう取り組みが必要なのかを考えていくことが必要になってくるのではないかと思います。

栄光園のご支援者

ご支援ありがとうございます。

栄光園は多くの皆様の継続した温かい思いによって支えられてきたことを心から感謝いたしております。皆様のこのような思いは、子どもたちの成長に、また、働く私たち職員の励みに大変大きな力となっていることをいつも嬉しく思います。

【2022年7月1日より2022年9月30日まで】

賛助金

増田百枝様　日田市
山口産業㈱様　別府市
津田眞五様　大分市
加藤敏夫・千佳様　竹田市
㈲後藤商店様　別府市
松本常圃・洋子様　別府市
立花旦子様　大分市

一般寄付

岩田哲也様　大分市
匿名様　別府市
伊勢方信様　別府市
後藤としみ様　豊後大野市
廣瀬理恵様　豊後大野市
福本陽子様　姫路市
里の駅ふるさと市場様　国東市
小手川裕市様　別府市
金谷英津子様　大分市
匿名様　別府市
大城佳美様　大分市
山口香様　別府市

自立進学資金

神鳥慶子様　杵築市
影山隆之・由利様　大分市
平川順子様　別府市
梶原康弘様　大分市
齋藤正治・康代様　日出町
山口香様　別府市

特別物品寄付

なす　BNR様
洋服　Meagan Jose Diaz様
カップラーメン　NPO法人自立支援センターおおいた様
紙芝居　NPO法人ラフターヨガジャパン様
バスタオル・お菓子・洋服・靴　安東秀典様
マスク・抗原検査キット・アイスクリーム　安藤昌春様
乳児服　池田絢子様
パン　石窯工房モコモコ別府店様
洋服・靴　伊藤まゆみ様
靴　ヴィーナスギャラリー別府様
梨　大分県園芸活性化協議会様
絵本　大分みらい信用金庫様
お菓子　たんぽぽ食堂(こども食堂)　大柳恵子様
ぶどう　ガーデン歯科様
絵本　加藤裕子様
アイスクリーム　㈱明治西日本支社様
団子の粉　㈱豊豫物産　会長　三ヶ尻英明様
衣類・靴・雑貨　㈱ジャムス様
食材　河野食品センター様
服　河野美千代様
本　九州労働金庫別府支店様
食パン　銀座にしかわ様
わらび餅・洋服　黒木正道様
ポケモン絵日記　広済堂ネクスト　さいたま第2工場
ポケモン子ども食堂応援隊！事務局様
パン　ココラート様
乳児服・幼児服　古谷翔子様
幼児服　後藤としみ様
米30キロ・自転車・ベビーカー　後藤正己様
ジュース・スープ・乾パン・救急バッグ　佐藤京子様
トマト・ナス　高橋惠一様
衣類・自転車　立山愛様
乳児服・ぬいぐるみ・靴・小物　谷まい様
かぼちゃ　谷口吉男様
お菓子　ユーコーラッキー　ウエスト　上人ヶ浜店様
パン　友永パン様
バスタオル　プールヴー友永優子様
乳児衣類　長野康範様
スイカ・桃・梨　中山田正春様
納豆　二豊フーズ㈱様
衣類　野中知美様
洋服・おもちゃ　野中優子様
乳児服　秦秀典様
絵本　平野モータース様
乳児服　プールヴーのお客様
アイスクリーム　福本陽子様
衣類　宮田愛子様
城島高原パーク入園無料券　村瀬久美子様
ジュース　村津奈穂様
花火、綿菓子、ポップコーンメーカー　明治安田生命　大分支社　大分北営業部様
風鈴・ハンカチ・バッチ　門司一徹様
米　本林優司様
洋服　矢澤あや美様
幼児服・ブロック・バッグ・靴　山本恵美子様
衣類　㈲トス・カンパニー様
筍・びわ・かぼちゃ　二宮洋典様

招待・奉仕

児童散髪　西村大輔様
〃　中村雄一様
集いの場くるみ　ボランティア　平川義文・順子様
金曜学校　尾崎二郎様
〃　庄司宣充様
書道　荒金節子様
英語レッスン・サッカー・音楽　Tim Dyck様
手芸指導　村津奈穂様

クリスマス祝会中止のお知らせ

今年度は、例年12月に行っておりますクリスマス祝会は、コロナウイルスの感染状況を鑑み中止いたします。

2022年度10月　職員の動静

採用
- 青山保育所　後藤　美里（保育士・パート）9月1日付

退職
- 野口保育所　加藤　麻恵（保育士）　9月30日付

賛助会員募集

年会費、一口千円、但し、何口でも、分割も可。ご連絡いただければ職員が参上します。栄光園賛助会事務所は、別府市南荘園町3組です。賛助会員の皆様には、栄光園の広報誌『栄光園だより』を送付させていただきます。

郵便局での振込は左記までお願い致します。
口座名義　社会福祉法人　栄光園
口座番号　01930-2-207748

苦情等相談窓口

＊法人および各施設での苦情等は下記の連絡先へご相談ください。
tel.0977-23-2827
fax.0977-23-7520
mail eikoen@live.jp

編集後記

世界のあちこちで起きている異常気象や、戦闘状態に陥っている国々の存在など、今地球上がとても不安定な状態になってきているように感じます。「普通の日常」が如何にありがたい（有難い）ことかということを感じます。1日を無事過ごせたことに感謝して一日を終えるようにしていきたいものです。（原田）